

ミヤンマー インレー湖周遊と トレッキングの旅

その2

田上悦子

◎陽の暑く土まで熱きミヤンの山トレッキングする吾ら何者

暑い時期なのでトレッキングはたぶん2〜3時間の歩きだるうとみんな

（5人）で勝手

に思っていたら、ガイドの話では一泊二日のトレッキングとのこと。リーダー始めみな高齢者で身体に腰痛等、問題も抱えている身、大丈夫かと不安になる。結局誰か一人に無理な微候が見えればその時点で中止、引き返すことを確認して決行となった。



竹組で作られたトイレ

トレッキングの朝、ガイドは自分より更に若い18歳のガイド見習いを助手として連れてきていた。歩くのは険しい山道ではないが、とにかく上からも下からも熱い。20分歩いては大きな樹陰でゆっくり休憩をとる。いくつかの小さな村をめぐる最終の村へは2時40分頃に到着。宿泊所は二階の広間の一部屋へ我々5人が泊まり、隣の囲炉裏のある狭い一部屋にガイド二人が泊まり、その囲炉裏で食事を作って運んでくれた。英語にまだ自信がないのか声が小さく聞き取りづらい助手も、食事の準備ではしっかり手伝い、若い男二人だけで台所も調理道具もろくにない場所でも品数そろえた料理を作ってくれた。もちろん火は薪で。シャワーはなく、村の共同の水場で顔と手を洗い歯を磨いていると村人が珍しそうに眺めている。水の出る口が離れて二箇所あるのだが栓が微妙で、抜いてしまうとドバツと出るのです。らしい方が難しい。トイレは戸外の畑の中にポツンと竹組みで作られている。隙間だらけだがもうすっかり気にならな

くなった。

◎竹組みの隙間だらけのトイレにもたじろがず行く旅の終盤

夕食後は疲れているので早々と毛布を敷き、夫婦2組とリーダーの5人、綺麗に並んで就寝。

翌朝は違うルートで帰途。途中ワイナリーへ寄ってワインを味わう。このトイレは珍しく洋式で、やはりほっと落ち着く。途中、村の店で昼食の予定が、店のおばさんが病気とのこと。迎えの車を待ち、町へ帰ってレストランでシャン・ヌードルを食べる。心配したトレッキングがだったが、何とか（笑は、何となく（笑は、村での宿泊の夜、男性一人の足がっつき、生まれて初めてというほど長く続く痛みに涙の騒動があったのだが…）

一応無事にホテルへ帰りつくことができた。しかし暑い時期のトレッキングはやはり大変である。夫はトボトボ前を歩く一行と、サバンの焼け付くような太陽が地面に写す自分の影を見ながら、「バターン死の行進」と形容したほどです。

三十五歳の夏は十八

シーズンⅡ

奈良 白毫寺

松山 和雄

正月休みも終わり近くになると奈良の中心部を少し外れたこのあたりは随分と静かになっていく。戒壇堂から新薬師寺を巡り終え、門前の駐車場に立つと、左手の斜面に白毫寺の墓が見える。初めてその寺を訪れたのは三十歳の頃だった。

夏の休みを利用して京都・奈良の杜寺を訪ねた。あの夏も梅雨明けすくから猛烈に暑かった。新薬師寺の十二神将を見てお堂の外に出ると夏の

高知県人権共闘 学習講演会と16年度総会 改憲阻止と 部落差別解消法案反対の 闘いを

田中正

人権と民主主義、教育と自治を守る高知県共闘会議

（闘）の学習講演会と16年度総会が、7月16日に婦人会館で開催されました。講演会は、滋賀大学の梅田 修名誉教授が講演、約30名が参加（高退協からは8人）し、「96年の地域改善対策協議会『意見具申でも』実態的差別は解消されていると明記しながらも差別意識は依然として根深く存在している」として、人権教育・啓発の性格を人権を柱としない「差別意識」解消のための教育・啓発とした精神主義的色彩と他の人権問題も重要なのに同和問題だけが重要な柱とする同和教育的色彩の二つの柱をいつまでも行政が手放さないこと、しかしこの間の人権教育・啓発施策が、人権教育の名のもとに同和教育的のさらなる推進の余地を与えたことと同和教育的に限定されない教育への発想を導き出し、部落問題に直接関わらない問題への取組（同和問題の形骸化）を促進したことを話を話されました。

総会では、人権共闘の三つの基本的姿勢や15年度の取り組みと課題、16年度の活動方針、鎌田伸一議長、原 淳副議長をはじめとする役員・事務局の体制が決まりました。



旬、ビルマ暦の年末に当たります。人々は清めの水をかけ合い新年を迎えます。旅人の私たちもまるで消防のような大きなホースで思いきり水をかけられました。

◎花房をゴールデンシャワーは名のごとく垂らせてヤンゴン水かけ祭り



日射しに肌がかじられるようだった。門前から向かいの白毫寺の集落までは緩やかな斜面の幅広い段々畑になっていく、が途中日射しを遮るものは何もない。熱気の大河を犬かきで渡っているような気分になる。ジグソーパズルのような細いあぜ道を右へ左へ向きを変えながら、や々と集落の軒の陰に隠れたときはホットしたことだった。

あれから三十年余の後、二度目の白毫寺へのあぜ道を今度はコートトの襟を高く立てて寒風の中を渡ってゆく。門前の集落にたどり着くと吹きつけていた寒風もすこし和らいだ。寺へのゆるやかな登り道わきの民家の様子も以前と随分変わっていた。何軒かの民家の土間に戸板を利用して「見世棚」を造り、焼き物や手作りの工芸品、民芸品を並べた小さなお店が出来ている。そんな道を九十歳くらいの夫婦連れが時々立ち止まりながらゆっくりと私と同じ向きに歩いている。

白毫寺は小ぶりの山門につづく築地塀と石段の両脇の萩が有名なのだが、真冬のこの時期には萩も株元から切られている。わずかに築地塀の裏手の竹やぶが冬の風に大きく揺れ、昔の風情を思い出させてくれた。

帰途、石段の上から山門を見降ろすと、先ほどの老夫婦が山門わきの陽だまりで肩を寄せて寒風を避けながら仲良くおにぎりを頬ばっていた。現在、白毫寺の近辺も開発が進み竹やぶも無くなっています。